

## 行き詰まり症候群

### 9：長所に焦点を置く

アンディ美湖

(訳：美湖純子)

Copyright 2001 Andy Meeko

私は生まれつき悲観的です。10歳の時初めてハワイへ行きました。私達が泊まったところは、オアフ島の北海岸で、鮮やかな緑で彩られた険しい絶壁とトロピカルな美しさに囲まれていました。人々が人生の中で一度は訪れたいと夢見るハワイです。しかし最初の日、私は日記にこう書きました。『朝起きて、蚊に刺されたあとを数えた。』(数年後その日記をごみ箱に捨てました。母がそれを見つけ、なんと日曜学校でパラダイスで虫さされを数えると話したのです。)

霊的な面でもこのような否定的な傾向を見ることがあります。マルコ7章にはイエス様がなされた驚くほどの奇跡や素晴らしい出来事にもかかわらず、パリサイ人は弟子達が手を洗わずに食べていると文句を言っているのです！問題は、「何に焦点を当てているか」です。私達が家族や教会で行き詰まりに直面する時、私達は問題を見ているでしょうか、それとも長所を見ているでしょうか。

教会でよく聞く言い回しで、私がうんざりした言葉は、「こんなに小さい群れですが、どうか主よこの集会を祝福して下さい。」です。なぜ私はこの言い方が嫌かという、焦点がいかにも私達は小さく弱いかにも当てられて、益にも薬にもならないのです。また、ある教会で新会堂を建てた後、「私達にもったいないほどの建物」と繰り返し言われていました。これは中にいる人々よりも建物の方が価値があると意味しているように聞こえます。これらは日本の教会の弱いアイデンティティを強調するたくさんの言い回しの幾つかです。全般的に日本の教会は弱い、小さいというコンプレックスがあるかもしれません。知らず知らずのうちに教会はこうした信念によって閉じ込められてしまい、小さいこと弱いこと、実りないことを強調してしまうのです。

今日のファミリーセラピーの傾向は明らかに楽観的です。今までのセラピーの殆どは可能性ではなく問題に焦点を置いていました。セラピストの役目は家族の問題を認識し、それを改める最善の方法を決めることでした。医者が病気を診断して、正しい薬を処方するように。主な焦点は問題自体に当てられていました。セラピーにおけるこの強調点は急激に変わってきています。今日の信念は、そのように家族にレッテルをはることは、回復をもっと困難にすると考えられています。現れている病理を見ることはそれを定着させてしまいます。今日のセラピーの焦点は、病理から能力に置き換えられてきています。この置き換えの背後には、家族は臨機応変で成長したり、学んだり変わったりする能力があるという楽観的思考です。全ての家族は隠れた、または認識されていない能力を持っていて、それがその家族の存続と将来の鍵なのです。このように、今日のセラピーセッションは問題を直すよりも、能力を引き出すことを強調します。何よりも賢いセラピストは家族の長所を認識させるよう助けます。これは熟練しないと出来ません。なぜならファミリーカ

ウンセリングの指導者 Dr. William Madsen が言うように、「能力は沈黙している。鍵はそれに非常に注意深く聞き入ること」だからです。

では、日本の教会の長所は何でしょう。私の頭に閃く 3 つのことは、聖さ、忠実、忍耐です。教会において世から離れた聖さを見ることが出来ます。日本のクリスチャンはこの世の人々と非常に違って見えます。純潔で神を敬った生き方を目指しています。不道徳で大きな戦いがあるアフリカの教会では聖さを長所とはいえないでしょう。忠実さでは、信者が未信者の主人や家族から反対されたり、落胆しても、自分の教会に忠誠をつくす姿を見ることが出来ます。このような忠実さは、牧師でさえも平均の在留期間は 3 年以下というアメリカの教会ではあまり見られません。

すべてのなかで、私は忍耐が日本の教会の最も輝いている長所だと考えます。私は日本の歴史を観察して心動かされました。数えきれないほど多くの人々が迫害を受けて、不正で凶悪な拷問に耐えたのです。1637 年だけで 37000 人以上の信者が虐殺されました。1597 年 2 月 15 日、長崎で 26 人のクリスチャンが十字架で処刑されました。250 年以上にわたって日本におけるクリスチャンの大虐殺が続きました。私は日本全土でクリスチャンの血が流されたことを知って驚きました。この土手で、あの山で、また人里離れた丘で。しかし記念祭もなければ記念碑もない。彼らは忘れ去られてしまったように、近くの教会ですら祝う事をしないのです。キリストの踏絵を踏むことを拒否した人々の血は歌声となって私達に届いているのです。キリストへの忍耐強い愛の歌となって。

あるとき私は、「知人の中で信仰のために大いに苦しんだ人で誰がいるだろう」と自問しました。私の知っているアメリカ人では誰も思いつきませんでした。しかし一人の日本人が思い浮かびました。彼、山元春雄先生は現在、パーキンソン病のために立つことも話すことも困難な状況です。しかし長きに渡ってマウイ島の日系一世の牧師として多くの人々の心に触れてきました。山元先生は私が知る中で最もエネルギーで暖かい人のひとりです。彼はピエロの服を着て、のこぎりでヴァイオリンのように演奏し、同時に人々をキリストに導くのです。年をとっていく一世の、さとうきび畑で働きながらやっと生計を立てて苦労している人々の牧師として最もふさわしい人でした。山元先生の書斎の白い壁に、美しいハワイのリースではなく、地味な棘の冠が掛かっていたのを覚えています。それは彼の過去の象徴としてふさわしいものでした。

戦時中、彼は神風隊でした。彼はクリスチャンでもありました。言うまでもなく、大日本帝国軍隊においてクリスチャンであることは恐ろしいことでした。迫害されることは決まりきっていました。彼は最初からそれをよく分かっていました。ですから入隊の時、宗教を書く欄に、最初キリスト教と書きましたが、思い直して仏教と書き、しかし提出の時には改めて再びキリスト教と書きました。軍人達は彼を、信仰を妥協しなければならない状況に陥れ、ほくそえんでいました。このチャレンジに対して彼は力強く立ち向かいました。しかしついにある日、彼の靴が無くなりました。その結果、彼は司令官に呼び出され、天皇の所有物を無くすという過失を非難されました。軍人の供給物は全て天皇に属す

る物だからです。それで彼は、靴を補給しなければならないと言われました。この命令はよく計画されたもので、この靴を補給することなど不可能なことでした。しかも彼の司令官自身がこの靴を盗ませたのかもしれませんが。彼の選択はたった二つだけでした。誰か他の人の靴を盗むか、大日本帝国陸軍の暴威に身を任すかのどちらかでした。彼は苦悶しましたが、クリスチャンとして盗むことが出来ず、力強く立ち向かうしかありませんでした。ついにその日がやって来ました。ある朝、会合のときに皆の前に出るように呼ばれ、他の兵士に「山元は天皇の所有物を盗み、有罪である」と通告され、見せしめとされました。彼はステージの上で気をつけの姿勢で立たされ、バットで打たれました。強打が彼を打ちのめしました。膀胱も抑えきれなくなりましたが、まだ打撃は続きました。ついに下着を汚してしてしまうほどでした。彼が気づいたときは病院でした。彼は昏睡状態で入院し、一ヶ月病院にいました。彼の体はもう以前と同じになりませんでした。

この話や前に書いた歴史は日本の教会の栄光です。これは教会の力強い長所である真のアイデンティティで、語り告げられるべきものです。これらは劣等感や行き詰まりの落とし穴を打ち破る力がある物語です。

そうです、日本の教会は行き詰まっています。しかし同時に教会は力強いのです。世界が日本を忠実な忍耐を学ぶ模範とすべきほど力強いのです。日本の教会がその流された血を払って得たレッスンなのです。